

【近藤 誠司 氏】

命を守る災害情報 ～巨大災害に立ち向かうために～

～防災を「我が事」にしてリアリティを醸成～

防災の分野においては、「我が事にする」ことが肝であると言われています。大学の私の講義では、「リアリティ」という言葉を使って学ぶようにしています。その情報や知識にリアリティがあるのか。災害時にみんなが動けるようなリアリティを醸成していくことが求められています。

～東日本大震災の経験を振り返って～

岩手県の野田村保育所では、約 100 名の職員と子供たち全員が助かりました。保育所では月 1 回の避難訓練が速足散歩という形で行われていました。先生方が我が事のようにいつか来るかもしれない津波のことを考えて訓練し、リアルに感じていたことで、全員が助かったのだと思います。

また、宮城県南三陸町の戸倉小学校でも校舎の中にいた方は全員避難することができました。避難マニュアルは未完成でしたが、手回し式の充電器つきラジオを購入するなど、災害時の避難の準備をしていました。そして、あの日、高台の神社まで逃げ、手回し式の充電器つきラジオで津波の情報を確認し、境内で一夜を過ごして助かることができました。

野田村保育所も戸倉小学校も助かったのは偶然ではなく、やるべきことを一つ一つ潰していき、リアリティを共有したことが助かることにつながったのだと思います。

～時間雨量 80 ミリの雨と聞いたら～

時間雨量 80 ミリの雨とは、人命をおびやかすほどの猛烈な雨です。早期避難が求められます。しかし、住民だけの判断では危うい場合がありますので、気象庁など行政の情報を使うとよいでしょう。例えば高解像度降水ナウキャストなどのインターネット上の情報は若者がとり、高齢者は今まで生きてきた知識と経験を生かす。若者と高齢者がそれぞれのリアリティを重ね合わせることで大きな力になるのではないかと思います。

～地域防災のためにできること～

神戸市長田区の真陽地区では、南海トラフ巨大地震の場合、指定避難所になっている真陽小学校も浸水する想定になっています。そこで、効率的な救助活動をするために、スーパーマーケットのカートを使って人を搬送したり、ラジオなどで入手した情報をトランジスタメガホンで伝える実験が行われています。また、小学校では校内放送を活用した防災学習を行っており、児童がその内容を家族に伝えることで、地域全体が学びあえるようにしています。

また、防災 CREDO (クレド) という取り組みでは、「自分は防災に対してこんなことができるよ」「いざというときにこんなふうに頑張るよ」など、「約束」の言葉を集めています。今、防災の分野では息の詰まる報道や情報が多いかもしれませんが、みんなが前向きに防災活動に取り組むことを考えています。

「助」という字は「力を重ね合う」という意味です。いざというときに助け合うことが何よりの防災力だと思います。防災に向け、リアリティを感じて共に情報をつくり、しっかり活用するということをぜひ考えていただけたら幸いです。

【稲垣 文彦 氏】

住民自らでつくる安心社会

～災害で失う損失と喪失～

災害は社会のひずみを顕在化させます。ひずみとは、もともとあった地域社会の課題であり、新潟県中越地震では過疎化・高齢化の課題が顕在化しました。人口減少社会の扉をあけたと言われるこの震災で、その中で我々はどう生きていくかという課題を突きつけられたのです。

災害で失うものには損失と喪失の 2 つがあります。損失とは、建物や道路など、お金をかければ元に戻るもので、これは復興の必要条件です。喪失とは、人命や地域のにぎわいなど、お金をかけても元に戻らないものですが、実はこの喪失感を埋めているかどうかによって復興感が変わってきます。それは、自分たちでその喪失感を何とかしようという当事者意識があるかどうかということです。

～当事者意識をつくり出すには～

新潟県中越地震後、山古志村では、当初は学生ボランティアが被災した地域の人たちにお茶出しをしていました。その後、今度は逆に、地域の人たちがボランティアに笹だんごづくりを教える取り組みを行いました。このことが劇的に被災者の意識を変えました。ボランティアの方々から「おいしい。ありがとう」と言われ、感謝されて、役割が出てくる。人に認められて、もっと何かやってみようという気持ちが生まれる。それが当事者意識に変わっていったのです。つまり、寄り添い型のサポートで一人一人に関心を持つ、存在を認めてあげることが、その人たちの当事者意識を出す原点ではないかと思います。

私は、防災、復興、地域づくりは愛だと思っています。愛とは何か。「愛の反対は無関心」というマザー・テレサの言葉がありますが、愛とは「関心を持つこと」だと思います。

～住民自らでつくる安心社会～

「住民自らでつくる安心社会」とはどういうものでしょうか。慶應大学の吉川肇子先生は、安心には、無知型安心、無知型不安、能動型不安、能動型安心の4種類あるとおっしゃっています。自ら知識を求めないまま何となく不安であるという無知型不安から、自ら知識を得ようとする能動型不安へ、さらには自ら動いて能動型安心を求める状態を継続的にしていく取り組みが「住民自らでつくる安心社会」のアプローチだと感じています。

今、山古志村では交流人口も増え、経済も回り始めています。それは、「この地域はすごい」「あのおばあちゃんに会いたい」と思った方がリピーターになってくれているからです。

これが、過疎が進んでも、外の人を力にかけてできる社会の形ではないでしょうか。

～共助社会と当事者意識～

実は震災後、山古志村では自殺がなくなったそうです。震災前は、自分で身の回りができなくなると自殺する方がいらしたそうです。厳しい自助のような社会だったのかもしれませんが。誰かに「困った」「大変だ」と言いづらかったのかもしれませんが。しかし、震災のときにご近所同士で助け合い、ボランティアにも助けてもらった。「自分一人で頑張らなくてもいいのかな」、そんな緩やかな共助社会ができたのだと思います。

大切なことは、自分たちで自分たちの地域を何とかしようという当事者意識を持つことです。何かをすることによって自分の人生も豊かになっていくのだと私は感じています。